平成27年(2015)
阿づまの光
6月号・Junio

五代教主作 灰釉茶盌 銘「七福神・布袋」
【ヨルダン土＋本宮山松釉】

題字出口直日

通巻第555号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 浅田秋彦
〒110-0008
東京都台東区池之端2-1-44
TEL 03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

日々に踏みし実地の経験は
学説よりも遥かにたふとし

出口王仁三郎聖師

理想の形をめざして

祭務課長 高野春樹（たかのはるき）

教主さまが東光苑春季大祭にご臨席になられ、久しぶりに典礼をさせていただきました。綾部では月次祭や教御祖様の毎年祭で教主典礼を務めていましたので、とても懐かしく感じました。緊張したのは言うまでもありません。典礼は後ろを見られないので、速度が速いのか遅いのか分からず、総じてゆっくり歩くのが習性らしく、「もっと速く」とお声掛けいただいたことがありました。

ところで、斎主はこちらでは数回務めただけですが、綾部時代にも何度かさせていただきました。長生殿の梅松苑月次祭で一回、みろく殿と緑寿館の月次祭は数回ずついたしました。ちなみに綾部最後は緑寿館月次祭の斎主でした。大神様への祝詞奏上なのに、正中を通り過ぎ、祭員S氏に厳しい目つきでにらまれて引き返すという失態を演じてしまいました。冷や汗をかきつつ最後まで務めましたが、今でも信じられない出来事でした。

斎主は、参拝者を代表して神さまへのお願い事を、言霊でお伝えする取り次ぎ役なので、祝詞奏上は、安易には宜（むべ）できないことなのです。ですから、本来は無心でお伝えすることが必要なのでしょうが、それはなかなか難しいことなのだと感じています。

また、先達としての祝詞奏上も、一人の時とは違います。一人の時は自分の速さでできますが、大勢の時は奏上する速さをうまく調整することは難しく、いつまでたっても慣れません。

斎主にしても先達にしても、この先、何回務められるかは分かりません。ですから、その機会を「一期一会」と思い、務めています。当たり前のことですが、その時その時の体験は二度とはできないのです。日々の精進の中から理想の形が身に付いてくるものなのでしょう。ひと時も無駄に過ごせないなと思いつつ、日々励ませていただいております。

大本公開講座

ことむけやわす

～医療における対話から協働の関係へ～

医師・慶應義塾大学
看護医療学部教授
加藤眞三

ことむけやわす

今、激動する時代を迎えています。世界のあらゆる国で、大きな出来事が起きていて、大きな時代の変わり目を迎えていると思います。日本にとっては、明治維新以来の変わり目です。政府は積極的平和主義と言っていますが、平和主義といっても、武器には武器で対抗しようとする動きです。どの国も、あまりうまくいっていない。ひょっとしたら資本主義が崩壊する前触れではないかと、経済学者も言っている。そういう時代を迎えているのです。

こんな時代だからこそ、〝ことむけやわす〟という言葉が非常に大切だと思います。ことむけやわすとは「言葉を向けて平和にする」という意味で、これは『古事記』にも出てくる単語です。

元気を増やす要素

健康に生きるためには、何が大事か。今までは病気になる可能性を減らすことが、大事だと言われてきましたが、もう一つに、元気になる要素を増やすという考え方があります。そのためには、〝感謝・希望・生きがい〟といった要素が大事であると考えられます。病気がないことが元気ではありません。病気であっても元気な人はいるのです。元気な要素を増やすことで、寿命を延ばすことができるのです。

それは、健康な部分を資源と捉え、その資源をどう活用するか、どう伸ばすかが大事だという考え方です。病気をとり除くのではなく、健康な部分をどう伸ばすか、それが大事であるということが、言われはじめてきました。健康創生論という考え方です。

スピリチュアルケア

また、これからの医療は、知識と技術を中心とする科学的医療のほかに、「スピリチュアルケア」が加われば、もっと素晴らしいものになります。

「スピリチュアルケア」について、ある論文で発表されています。心筋梗塞で入院した患者が6カ月後に、死亡率を含めてどうなったかを調査したのです。「エモーショナル・サポート（情緒的な支援）」をしてくれる人が2人以上いる人は、死亡率が低いという結果でした。「エモーショナル・サポート」とは、入院前や病気を発症する前に、その人が抱えている問題を相談できたり、難しい決断を助けてくれることです。その人が2人以上いると死亡率は低いのです。

このことから、人は社会的な関係性が良好な中で、健康が増進されるということがわかってきました。人にどれだけ支えられているかが、入院した後の予後（病気がどういう結果になるか）に、大きく影響するということが示されたのです。

対立関係を生む理由

今までの医療者はどちらかというと、権威の医学とか脅しの医学で「こんなことしたらダメだ」といい聞かせる医学でした。その中で、自立心の芽生えた患者は医療者に不信感を抱き対立してしまう。このような対立があると、例えば病気になったときに、前述のように相談できる相手がいた場合、死亡率が低いとありましたが、患者が医療者を信用できず、医療について相談ができない状態になると、死亡率に大きく影響することになると思います。

近代社会において、製品を大量生産・消費すると、経済の活性化につながりますが、いつしかこの流れの中で、公害や欠陥問題が起きてきます。そうすると市民運動などが勃発し、消費者対製造者という関係性がうまれてきました。原発の再稼動をとっても、原子力の研究をしている科学者は、原発の開発で生活していますから、あまり原発に不利なことは言いません。そうすると、科学者対市民となってしまうのです。

これからの医療

これからは患者を勇気づけて、寄り添う方向への医療が重要視されると思います。そのためには、患者と医療者が敵対する関係であってはならず、患者と医療者が対話をして、協働関係をつくることが大切になってくるのです。

現状では、患者に頼らせようという医療者がいるのと同時に、医療者に頼ろうという患者がいることも事実です。ですから医療者だけでなく、患者も変わらなくてはいけないのです。素人は知らなくてよいという医療は無くなるでしょうし、患者も医療者に対し、決定権をすべて委ねるのではなく、患者自身の価値観で、生きていきたい方向を伝えることが大事になります。現状の対立関係や依存関係を一度壊して、新しい協働する関係性をつくることが大事になってきます。そこで〝患者に学ぶ、患者も学ぶ〟をキャッチコピーに、大学で対話型講座を行っています。

人と細胞に共通する多様性

ヒトは約60兆個の細胞から形成されていますが、これは全部同じ遺伝子の細胞です。同じ遺伝子なのに、その置かれた場所・環境（脳・心臓・肺など）に応じて、細胞はさまざまな機能を営んでいるのです。それぞれの場所に応じた機能を発揮するような細胞になっているのです。これを多様性といいます。

そして、この多様性は細胞だけのものではありません。人間も細胞と同じように、社会の中や周りの環境の中で、自らの状況を感知して調和をしたり、自らを制御する必要があるのです。要するに社会や周囲の環境が複雑となり高度化するほど、周りとのコミュニケーションが大切になってきます。今、人々は周りと上手くネットワーク（連帯）しなければならない時代にきていると思います。

また、人間の体には〝一体感〟が備わっています。同じ思考を持つ人と一緒にいれば心地良いし、逆に反対意見は煩わしい。しかし、なにか一つ目標があれば一体感をもってはたらくようになります。

つまり、一体感と連帯を必要とするのが人間の特徴と言えます。人類は、はじめ親の世話にならないと生きていけません。親に依存していた世界から、徐々に社会の中で多くの人に依存する。それが独立です。一人で生きていくことが独立ではないのです。人類は本来力の弱い動物で、社会を作ることにより繁栄しています。社会を離れて生きていくことはできないのです。

各分野で協働関係を

社会の共有財産である医療を、いかに上手く活用していくか。社会の全員が参加し、各自が貢献し、多様性を力とし、協働関係における医療を実行していく必要があると思います。

大本では、人生の目的は「地上天国の建設」であると教えられています。「地上天国の建設」とは、それぞれの個人が自律、独立し、その個性・多様性を発揮し、かつ周りの多くの人とつながりをもち、依存・連携し、この地上に生まれたことをそれぞれの信じる神に感謝できる世の中を築くことだと私は思っています。

〝ことむけやわす〟を通して、社会の中に協働の関係性をつくることで「みろくの世」がもたらされるのだと思います。医療の枠にとらわれず、様々な分野で協働の関係性を築いていきましょう。

「患者に学ぶ、患者も学ぶ」

患者と医療者が敵であってはならない。
患者と医療者がお互いに対話をして、
対立の関係から、協働の関係へ。

掲載文は、平成27年2月18日に航空会館（港区新橋）で開催した「大本公開講座」講演録の要旨です。

企業繁栄祈願祭

第33回企業繁栄祈願祭は、4月26日午前10時30分から執り行われ、56人が参拝した。

祭典は祓式行事、大神奏上に続いて、斎主が市杵島姫命さまに「企業繁栄祈願祭祝詞」を奏上。全国から申し込まれた、180社の企業名が読みあげられ、世界経済の発展と繁栄を祈願した。

次いで、各企業の代表者が玉串を捧奠し、一同で「神言」を奏上、讃美歌を斉唱した。

祭典後、東光経友会を代表して、猪子恒代表幹事があいさつ。その後、朝倉泰・朝倉染布株式会社取締役会長が「苦節123年」と題して記念講演を行った。聖師さまの「信仰と誠意と努力なき時はいかなる事業も栄えざるべし」のお歌を紹介し、経営に対する誠意と努力の大切さを起業の歴史とともに講話した。

会社経営の基本は信仰

TPP交渉即時撤退要求街頭活動

TPP交渉即時撤退要求街頭活動は、5月9日、都内3箇所で行われ、関東教区の宣信徒らが参加した。

活動に先立ち、午後1時から東京宣教センターで勉強会が開かれた。（参加者41人）

はじめに「TPP交渉即時撤退祈願祝詞」と「神言」を奏上。続いて「TPP交渉即時撤退要求活動について」と題して、稲垣裕彦人類愛善会副会長が講話した。その後、参加者は上野・渋谷・有楽町へ移動し、街頭でチラシ配布活動をした。（参加者35人）

なお、同日午前11時から午後3時まで、木根幹博愛善宣教部長を隊長とする本部奉仕者19人が東京に出向し、右記3箇所で街頭活動を行った。

この日の配布チラシの総数は3523枚だった。

渋谷での街頭活動の様子

東光苑月次祭

東光苑月次祭・市杵島姫命例祭は5月10日午前10時30分から、斎主・高野春樹祭務課長のもと執行され、340人が参拝した。

祭員は千葉主会、少年祭員は東京主会の鈴木愛徠（あいな）さん、涌井三四郎くん、伶人は宮咲会関東支部、大本神諭拝読は長友智栃木主会長、添釜は東京主会玉松分所が担当した。

祭典後、猪子恒東京宣教センター次長に続き、木根幹博愛善宣教部長があいさつに立ち、教主さまの過去のごあいさつ文を紹介しながら、「われよしの心を取り払って、省み・悟り・祈り・為すことは、身魂磨きにつながる。その上で、有形無形のご用に直接つとめさせていただくと、神さまはめぐりを取ってくださる。そのことを忘れず、これからのご用に、共々まい進させていただきたい」と述べた。次いで西山桂一郎大本青年部長から、夏期行事への参加送り出しについての呼びかけがあった。

その後奉納行事にうつり、東京主会による愛善歌「覚醒」がエスペラントで合唱された。

あいさつする木根幹博・愛善宣教部長

清々しい歌声が殿内に響き渡った

大本公開講座

第147回『大本公開講座』は、5月20日午後7時から、港区新橋の航空会館で開催され、成尾陽・大本教学委員が「日本人と〝はらい〟―目に見えないものを大切に生きる―」と題して講演した。参加者は31人（内、一般12人）。

講座では、日本人が自然のなかで育んだ文化を紹介しながら、神道の〝はらひ〟と祈りの関係性を説いた。

参加者からは、「日本の伝統文化の大切さを改めて思いました（男性・一般）」等の声が寄せられた。

日本の風習や言葉について詳しく話した

東光苑祭典・行事予定

6月

14日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・人類愛善会創立記念平和祈願祭・市杵島姫命例祭

17日（水）午後7時～8時30分
大本公開講座（航空会館・港区新橋）
講題　祝詞のこころ
～神に奏上する言霊～
講師　出口眞人
（大道場講師・社会福祉法人愛善信光会理事長）

28日（日）午前9時30分（受付）～午後4時30分
東京本部直属信徒研修会

7月

12日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭

15日（水）午後7時～8時30分
大本公開講座（航空会館・港区新橋）
講題　芸術は宗教の母
～大本の芸術文化活動～
講師　尾崎泰良（大道場講師）

大本東京本部ホームページ
URL http://oomoto-tokyo.com